

学 界 消 息

昭和三十三年京都大学卒業論文題目

国 史 学 専 攻

- 中世仏教の展開 藤井 俊嶺
- 米騒動を契機とする体制的危機と選挙 守屋 正道
- 権問題 小林 宏
- 出雲崎港の史的変遷とその廻米関係事 小林 基悦
- 項 石井 久澄
- 灘循環鉄道の問題 石躍 胤央
- 律令時代の稷稻数 大山 喬平
- 土佐藩初期藩政の一考察 河音 能平
- 庄園制の再編と崩壊 後神 俊文
- 十二・三世紀における在地領主制と荘園領主制 猿橋 靖
- 木下尚江考 鈴木 良
- 島原乱の原因としての牢人の評価について 中野 玄三
- 生糸貿易と国内資本 早崎 満雄
- 古代末期における民間の六道思想 安丸 良夫
- 大正政変の一考察 長州藩における討幕派成立の政治過程

(修士課程)

- 庄園村落と商業の問題 三浦 圭一
- 石川啄木研究 上田 博信
- 畿内における地主制生成の一考察 酒井 一
- 近世末期上越の領主と領民 高沢 裕一
- 国衙領の展開をめぐる封建化の過程について 戸田 芳実
- 資本制的生産の展開 中村 哲
- 西国における領主制の構造と展開 藤本 進
- 東洋史学専攻 梅原 郁
- 宋代の鎮についての劄記 岡崎 正孝
- アッバス朝下における駅道路について 加納和二郎
- 桑弘羊について 楠山 修作
- 五代南漢国の発展とその対外交渉 郷 由紀子
- 種族革命と政治革命の思想 フォールスの租税 清水 誠
- 商鞅の変法について 永田 英正
- (修士課程) 元代の土と吏 勝藤 猛
- 淮軍の成立―李鴻章の登場 小野 信爾

明代蘇州府の発展と農村の変貌

寺田 隆信

西洋史学専攻

- 独逸農民戦争に関する一考察 大島 隆雄
- フランス革命期の農民運動に関する一考察 服部 春彦
- 一九世紀末キューバ動乱に対する米國朝野の態度 北村 彰一
- 蒸気機関の発明とそれに連なるイギリス諸工業の発展について 三井 博
- Gerard Winstanly とその思想 井上 明
- 一八六〇年英仏通商条約 コミヌの課税観 加藤 英次
- 米西戦争に関する一考察 三木 雅文
- ルイ一四世の宮廷とモリエール 喜福 武
- ニュー・デイル試論 諸浦 久恵
- チャーチスト 小西健之助
- 『ロマン派』についての一考察 藤島 嘉夫
- サン・シモン及びサン・シモニアンに於ける階級観の変化 堀井 敏夫

⑤① 註②の諸論稿及び管侯「評小学誌経」——「雅言」第一年第十期——同「談論語」——同上、第十二期——

⑤② 註②の「雅言」第一年第六期「国内紀事」、及び管侯「現勢之中華民國観」——「雅言」第一年第六期——、「長沙社会面観」——「新青年」七ノ一——

⑤③ これらについては、未定稿「甲寅期の李大剣」でふれる予定であるが、当面、これまで余り注意されなかつた無名人の「甲寅月刊」や「新青年」への投書欄を見よ。

⑤④ 戈公振氏「中国報学史」、三聯書店、一九五五・三初版。

⑤⑤ 「新青年」二ノ五への呉虞の投書参照。この史料は亦、呉虞——陳独秀、「甲寅月刊」——「新青年」の人的關係を示す史料としても貴重であると思う。

⑤⑥ 章士釗「政本」——「甲寅月刊」一ノ一。

⑤⑦ 劉陔「新聞記者与道德」——「甲寅月刊」一ノ二。

(八七頁より)

ニュー・ディールにおける独占対策と

基盤としての思想的展開 橋 亮右

アレキサンドロス大王の政治思想に

関する一考察 大牟田 章

(修士課程)

シュレージエンにおける農業変革

末川 清

革新主義運動について

志邨 晃佑

人文地理学専攻

北海道農業の人文地理的考察

池上 一誠

滋賀県西北部の交通路と集落の歴史地

理的考察 井戸 庄三

綾部盆地における農業構造の歴史地理

的研究 大槻 守

地方小都市の歴史地理的考察 大脇 保彦

大阪市の周辺と通勤交通 木村 辰男

近郊山村におけるアーバンゼイション

塚田 秀雄

(修士課程)

都市域農業における專業・兼業の地域

的分化について 井上 一男

古代行政区劃の地理的意義 服部 昌之

核心地域と周辺地域 山澄 元

考古学専攻

(修士課程)

エジプト・メソポタミア・中国におけ

る帝王陵成立過程の比較研究

小野山 節

⑥① 註⑦参照。

⑥② これについても、未定稿「甲寅期の李大剣」参照。

⑥③ CC生「生機」——「甲寅月刊」一ノ二——

⑥④ 伍子余「言之者無罪」——「甲寅月刊」一ノ七——

⑥⑤ 高一涵「民福」——「甲寅月刊」一ノ二——

⑥⑥ 章士釗「政本」——「甲寅月刊」一ノ一——

⑥⑦ 漸生「参政院」——「甲寅月刊」一ノ三——

⑥⑧ 洗心「官国与總督制」——「甲寅月刊」一ノ三——

⑥⑨ 章士釗「政本」その他「甲寅月刊」所収の諸論稿参照。

⑦⑦ 「甲寅月刊」一ノ三。

補註① 徐宝山とその暗殺については、「言治月刊」第三期、

「国内紀事」参照。

——一九五七・四・六・脱稿——